

## 論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	和田 晴吾（わだ せいご）
○学位の種類	博士（文学）
○授与番号	乙 第532号
○授与年月日	2015年2月27日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第2項 学位規則第4条第2項
○学位論文の題名	古墳時代の葬制と他界観
○審査委員	（主査）矢野 健一（立命館大学文学部教授） 木立 雅朗（立命館大学文学部教授） 高 正龍（立命館大学文学部教授） 一瀬 和夫（京都橘大学文学部教授）

### <論文の内容の要旨>

本論文は「古墳とは何か」という問いに対する著者の見解を論じたものである。著者は、古墳とは「墳丘の内部に遺体を埋納する墓として機能するとともに、その表面に死者の魂が赴くであろう他界（来世）を表現した「他界の擬えもの」（模造品）として仕上げられ」と結論づけ、この古墳がはじめて日本列島に出現したことの文化史的、思想的意味を読み取り、当時の社会における意義を論じている。本論文は2014年4月10日に吉川弘文館から同名の著書として刊行されており、構成は次のとおりである。

序

第1章 葬制の変遷

第2章 「据えつける棺」と「持ちこぼる棺」

第3章 墓坑と墳丘の出入口

第4章 「閉ざされた棺」と「開かれた棺」

第5章 東アジアの「開かれた棺」

第6章 黄泉国と横穴式石室

第7章 古墳の他界観

第8章 古墳づくりに関する若干の考察

付論1 石棺の出現とその意義

付論2 日本の古墳の特徴と加耶の墳丘墓

付論3 古墳の理解と保存整備

## 終章 可視化された他界

以下、各章ごとに、要旨を述べる。

「第1章 葬制の変遷」は、古墳の築造過程の相違にしたがって、墳丘と内部施設を「竪穴系」「横穴系」「横口系」の3種に大別し、それぞれを細別し、細別された各種類が墳丘と墓坑の構築順序において「墳丘先行型」「同時進行型」「埋葬後行型」の3種にまとめうることを論じている。内部施設の種類である「棺」「槨」「室」をそれぞれ定義したうえで、棺を「据えつける棺」と「持ちほこぶ棺」に区分し、飛鳥時代の古墳をのぞけば、古墳時代の古墳に採用された棺は家形石棺など運搬可能な棺も含めて基本的には古墳築造時に設置された「据えつける棺」である可能性が高いことを論じている。また、畿内では横穴式石室導入後も追葬不能な「閉ざされた棺」が主流なのに対し、九州では横口式石棺など追葬可能な「開かれた棺」が主流となる点、違いが生じることを論じている。なお、寿陵は古墳時代に営まれたとすれば「墳丘先行型」が盛行する前・中期に限られると推測している。また、古墳時代においては畿内の横穴式石室に複数の家形石棺が設置される場合でも、本来の意味における追葬ではなく、合葬にすぎないはずだと論じている。

「第2章 『据えつける棺』と『持ちほこぶ棺』」は、古墳時代の畿内を中心とした地域における棺設置のタイミングの問題を詳しく論じている。著者は、日本列島における棺は弥生時代の木棺・石棺も含めて基本的には、古墳時代前・中期まで据えつける棺として機能したと論じている。そのことは、埋葬儀礼において棺が長大化し、納棺儀礼が盛大化し、それが墳丘頂部の墓坑で行われることになり、古墳の築造そのものに大きな影響を与えたと推測されている。また、畿内においては横穴式石室導入後も、釘付式木棺や石棺の規模から考えれば、棺は据えつける棺であったと論じている。そして、「持ちほこぶ棺」は、飛鳥時代に横穴式石槨が用いられるようになるときに出現する漆棺や小型の木棺が初現であると論じている。この持ちほこぶ棺の出現は、納棺儀礼と結びついた古墳時代の遺体埋納儀礼は衰退し、葬送儀礼の中心はモガリ儀礼（および遺体埋納後の墓前儀礼）に移行し、古墳築造は葬送儀礼と切り離された土木工事と化し、古墳は単なる墓に変化していったと述べている。

「第3章 墓坑と墳丘の出入口」は古墳上の儀礼における人間の「動線」を復原するために、墓坑や墳丘への出入口を論じている。墓坑への出入口は墳丘上から墓坑へ降りる形態と、墓穴の一辺の壁を掘り抜く形態の2種があり、前者は納棺儀礼に伴うもので後者は墓坑掘削や棺の搬入に伴う作業用の出入口で、両者とも前方部から後円部に向かっていくことを指摘している。また、墳丘への出入口は前方部と後円部との境界である「くびれ部」付近にあることが多く、周濠のある古墳では陸橋が設けられたが、作業用・儀礼用とも最終的に取り払われることが多かったと論じている。さらに、くびれ部の「造出」は陸橋に付随した墳丘側部分が儀礼の場として残されたものと推定している。そこで行なわれた儀礼は後円部頂上での首長権継承の儀礼が場所を移行したものであることを、埴輪などの出土遺物から論じている。

「第4章 『閉ざされた棺』と『開かれた棺』」は、著者のいう「据えつける棺」の機能について論じたものである。著者は、弥生時代は「棺の時代」であるが古墳時代は棺を設置する槨が発達する「槨の時代」と位置付ける。竪穴式石槨とは、棺を密閉する装置であり、「閉ざされた棺」にふさわしいものであると論じている。古墳時代後期に畿内に横穴式石室が導入されても棺は密閉されたものであることを強調している。一方、畿内にさきがけて導入される九州系の横穴式石室では、石棺は蓋石を消失し、「石障」や「屍床」へと変化していき、蓋石のない「開かれた棺」に変化する。また、九州に見られる棺と室が一体化した横穴式石室において彩色壁画が盛行することや、畿内の横穴式石室は百済と関係し、九州系は新羅と関係があることを指摘している。

「第5章 東アジアの『開かれた棺』」は、九州系の横穴式石室の諸施設と類似した施設を有する朝鮮半島や中国の同時代の墓を論じる。朝鮮半島では「石枕」を有する慶州周辺（新羅）や大同江・鴨緑江流域（高句麗）、および「屍床台」を有する洛東江流域（加耶）に、中国では「石棺床」や「家形石槨」のある北朝の領域に「開かれた棺」を指摘する。そして、九州系の横穴式石室における「開かれた棺」は中国北朝との関係で理解すべきもので、「畿内—百済—南朝」とは異なる「九州—（高句麗）—北朝」という関係を想定しようと論じている。

「第6章 黄泉国と横穴式石室」は、横穴式石室を反映していると考えられてきた黄泉国訪問譚と墓制との関係を再検討する。著者は横穴式石室を畿内系の「閉ざされた石室」と九州系の「開かれた石室」に二分するが、黄泉国訪問譚の舞台は九州系の「開かれた石室」そのものであると指摘する。著者は黄泉国（石室内の玄室）の「黄泉比良坂」が石室内の羨道、「千引の石」が石室の閉塞石である点は従来の諸見解を踏襲するが、「殿」や「殿の藤戸（とざしど）」は石室の入口や入口の戸ではなく、黄泉国、すなわち玄室の中にある建物（家）であり、そこに腐乱遺体が置かれている状況を想定すべきだと主張する。それは、九州系の「開かれた棺」のうち、著者の分類では「組合平入り横口式石棺」であり、黄泉国は九州系の横穴式石室を反映していると論じる。古事記の黄泉国訪問譚に登場する地名が九州系横穴式石室の影響を強く受けた出雲と、筑紫に限られることもこのことと関係し、また、黄泉国訪問譚の起源は九州系横穴式石室と同様、中国中原地域に求められる可能性もあると指摘する。

「第7章 古墳の他界観」は、古墳の築造と埋葬の手順、さらに墓上儀礼や墓前儀礼を説明し、古墳には墓としての性格以外に、「他界の擬えもの」としての性格があることを論じる。著者は墳丘には飲食物を入れた食器の台としての円筒埴輪などが立てられ、墳丘上や墳丘出入り口付近では食物供献儀礼が行なわれ、他界としての古墳は飲食物があふれる永遠の幸福に満ちた世界が表現されている、と論じる。古墳は首長霊継承儀礼の場であるという説があるが、著者は遺体埋葬後、古墳で祭祀が継続的に執行された形跡がほとんどないことから、むしろ、他界を表現したものであり、魂が天（他界）で永遠に生きるとみなす中国起源の「魂魄」の思想が影響しているという説に賛意を示す。古墳出土の船形埴

輪はそれが古墳の出入り口から出土することから、遺体の魂を他界に届けたことを示すと論じる。古墳の規模や墳丘上の装飾は首長がその身分に応じて赴く場としての他界を表現していると論じる。

「第 8 章 古墳づくりに関する若干の考察」では、古墳の築造過程に関する著者の分析を踏まえて、古墳、特に前方後円墳が埋葬者が生きている間に作られた寿陵である可能性が高いことや、古墳づくりにおいて「視葬者（はぶりのつかさ）」と呼ばれる古墳づくりを含む儀礼を指揮する職掌の重要性、および古墳づくりと軍事行動の類似性を論じている。著者は前方後円墳を中心とする大古墳が寿陵であることを基本的に肯定し、日本書紀における大王・天皇の埋葬記事の分析から、寿陵としての古墳が、仮埋葬の墓と本埋葬の古墳が併用される段階を経て、後に作られる墓に変質していくことを論じている。また、交換経済が未発達な古墳時代の社会においては、米や布などの貢納には限界があり、労働力は生産力を高めるための耕地の拡大よりも軍事行動と古墳づくりを中心とする王権への奉仕に投入された、と結論づけている。

「付論」3編は、本論で述べられてきた古墳の意義をわかりやすく述べながら、トピックをしぼって論じたものである。

「終章」において、「他界の擬えもの」としての古墳は、首長の魂を冥界に送るために、同族的関係を中心とした集団が階層的に統合された政治体制（首長連合体制）のもとで、経済の発展が不十分な社会にふさわしい儀礼として発達したと結論づけ、古墳の儀礼には、遺体を納め、死者の魂の冥福を祈り、社会を統合する機能があったと論じている。著者は、古墳の有していた社会的機能は仏教の儀礼へと比較的スムーズに移行していったことを推察している。

#### <論文審査の結果の要旨>

本論文は古墳時代に関する著者の研究のうち、古墳時代の葬制に関する問題を体系的に論じたものである。古墳の作り方やその種類、あるいはその変化という発掘調査で直接観察できる物質文化的な問題にとどまらず、他界観という観念的な問題にふみこんでいる点に特色がある。他界観という観念的な問題は古墳研究でもしばしば取り上げられるが、本論文で特にすぐれていると評価された点は、古墳の築造過程そのものの中に儀礼行為の手順、ひいては死生観を読み取る著者の視点と分析手法である。しかも、他界観という宗教的問題が政治・社会・経済という分野と組み合わせられる形で論じられているので、観念論ではなく現実的な問題として議論が進んでいる。著者のこのような研究視点と研究手法は、古墳時代研究にとどまらず、葬制という問題を考古学でどのように論じるべきか、という点において、重要な指針となりうる。その点、本研究は考古学全体において大きな影響を及ぼす研究成果であるといえる。

本論の具体的な研究成果で特筆すべき点は4点あげられる。第1に、古墳時代の棺は原則として遺体を持ち運ぶための容器ではなく、石室築造当初から据えつけられていたことを発掘事例に即して詳しく論証している点である。従来、古墳の築造過程に関する研究や、石室・石棺の分類・編年・地域性に関する研究は数多く存在する。著者の石室や石棺に関する分類は、著者独自の観点から整理されたものとなっているが、その分類や編年的検討に本論文の特色があるわけではなく、その本質に関する洞察に特色がある。古墳時代の石室は竪穴式石室・横穴式石室を問わず、原則的に石室築造当初から棺を据えつけるために作られたものであり、遺体を持ち運ぶことを想定できる棺は飛鳥時代になって出現する、という指摘は、古墳時代の葬制の原則の明示でもある。

第2に重要な点は、従来から問題となってきた畿内系横穴式石室と九州系横穴式石室との相違に関して、「閉ざされた棺」と「開かれた棺」という形で両者の相違の本質を洞察した点である。横穴式石室やその内部施設の分類や編年観には著者独自の視点が加味されているが、重要な点は、両者の形態的な相違が埋葬儀礼や他界観の本質的な相違と関わるものであることを論じている点である。さらに、黄泉国訪問譚が横穴式石室一般を反映したのではなく、九州系横穴式石室のみを反映していると論じ、そのことが神話の内容やその位置づけとも関わっていることを指摘している。さらに、両者の差が東アジアにおける葬制の系統差と対比できることを論じ、畿内と百済との関係に対抗する九州と北朝（および高句麗）との関係を指摘し、古墳時代後期における両者の系統差の本質的な意義は、単に他界観にとどまらず、政治的な意味を帯びていることを明らかにしている。

第3に重要な点は、以上の2点をふまえて、古墳とはなにか、という問いに対して、墓や儀礼の場を超えた「他界の擬えもの」であることが本質的特徴であることを洞察した点である。従来、前方後円墳を主とする大古墳は単なる墓であるだけでなく、首長霊継承の儀礼の場であるという説が有力視されていたが、著者は中国起源の魂魄思想に基づいて、魂が永遠に生きる場としての他界が古墳に表現しているとする説に賛成し、船形埴輪などを重視して船が魂を他界に運んだことを新たに指摘する。従来、船そのものあるいは船に似た木棺の存在から舟葬を想定する説もあったが、著者は舟葬説には批判的で遺体（魂）を古墳の入口まで船で運んだ時点で船の役割は終わっているとみなし、古墳自体が他界であることを強調する。

第4点として、このように単なる墓を超えて「他界の擬えもの」として作られた古墳は、古墳時代の社会特有の条件によるものであり、前方後円墳を主とする古墳が出現する時代こそが首長連合体制に基づく政治体制の確立期で、その政治体制の変質する飛鳥時代において古墳が遺体を納める墓に変質していくのは、必然的理由があることを明らかにしている点をあげられる。葬制と政治・社会・経済的条件との関係を論じることにより、古墳そのもの、ひいては古墳の作られた時代の歴史的意義を明らかにしている。

以上のような点が審査委員から高く評価されたが、説明が不足していると指摘された点はいくつかある。まず、本論文でとりあげられた古墳は前方後円墳を中心とする首長の古

墳を問題にしており、群集墳等の小古墳に関する記述はない。小古墳に関する説明が含まれていればより厚みのある論考になったという意見があった。また、古墳には複数の遺体が埋葬されている事例も目に付くが、著者の埋葬儀礼に関する説明では、複数遺体埋葬例はほとんど念頭におかれていない。この点については、個々の具体例に則して説明を追加してほしいという意見が出された。また、殯（もがり）は埋葬儀礼の中で重要な役割を果たしたはずだが、これについての説明が欲しいという意見が出された。これに対して、著者は、古墳において他界は可視化されているが、殯（もがり）は可視化されておらず、古墳内ではなく、居館に近い場所で行った可能性がある」と回答した。また、畿内系横穴式石室が密閉された棺として石室築造時から設置されていたという著者の考えに対して、須恵器を作るためにロクロが使用されたのは確実なので古墳時代に滑車が存在したことは十分に考えられるが、滑車があれば石室内で石棺の蓋石を開閉することは可能ではないかという意見があった。これに対して、著者は古墳時代に車輪の存在は確認されていないので滑車も同様であろうと回答した。さらに、黄泉国訪問譚と九州系横穴式石室との関係について、黄泉国神話と九州系横穴式石室が同時に伝わったのか、それともいずれかが先行して伝わったのか、という質問に対して、著者は黄泉国神話が政権中枢に伝わった後に、九州系横穴式石室を投影させて解釈した可能性がある」と回答したが、この点に関する著者のより詳しい議論を期待しているという意見が出された。

ただし、以上のような質問・意見は本論文の評価に影響を与えるものではない。本論文は、発掘調査で直接観察できる古墳の築造過程から儀礼の手順、ひいては他界観を論じ、そこから古墳の本質的意義を新しい視点から洞察した点、さらに、その時代の社会の特質を考古学的観点から明示し、古墳研究にとどまらず、葬制研究に新しい視点を提示した点、本研究は考古学全体において大きな影響を及ぼす研究成果であるといえる。以上の理由から、本論文が博士論文にふさわしいものである点、審査委員全員の意見の一致をみた。

#### <試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2014年11月19日（水）16時30分から19時まで、末川記念会館第2会議室で行われた。本論文の内容はもとより、質疑応答の的確さや説得性、また同氏のこれまでの数々の学会発表や公刊図書や論文などからも、博士学位に相応しい能力を有することが確認できた。また、日本語だけではなく韓国語や中国語の論文・発掘報告書多数を駆使している点などからみて、外国語の能力も十分である点を確認した。したがって、学位規程第25条第1項により、これに関わる試験の全部を免除した。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第2項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。